「逆転の発想」が生んだ発見　秦野 秀明

３月21日（月）発行の「東武よみうり」に筆者の調査結果が掲載されました。

読者と共に歩む
東武よみうり
週刊
THE TŌBU YOMIURI SHIMBUN 第2150号
2022年（令和4年）3月21日（月）
発行所
東武よみうり新聞社
〒343−0843
埼玉県越谷市蒲生茜町3−9
電話（048）987−0611
Fax（048）987−0614

大正の「送電線台座」発見

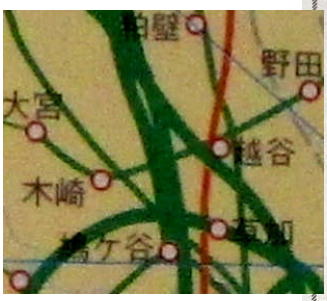
越谷の郷土史家

旧越谷飛行場跡地で

新潟−東京間 当時の最高電圧 〝近代化遺産〟目指す

越谷市大沢の郷土史研究家、秦野秀明さん（65）（接骨院院長）がこのほど、終戦直前に完成した「越谷陸軍飛行場」（同市小曽川）跡地で、送電線の鉄塔の台座部分を発見した。滑走路建設に伴い撤去された跡とみて調べたところ、「東京電燈」（現在の東京電力の前身）が1914年（大正3年）、新潟県津南町の水力発電所から越谷を通って東京・亀戸変電所まで敷設した送電線とわかった。当時の最高電圧の送電線で、「大正期の東京の電力需要や産業発展に寄与した」（東京電力）という。このため、秦野さんは「送電線遺構は後世に残すべき。『近代化遺産』となるよう行政などに呼びかけたい」と話している。

大正３年に設置された「高圧送電線鉄塔の台座」と調査した郷土史研究家の秦野さん



↑　出典①より引用

越谷陸軍飛行場は、太平洋戦争末期の45年6月、現在の越谷市小曽川と、さいたま市岩槻区にまたがる地域に完成した。実際には使われず〝幻の飛行場〟と呼ばれる。

秦野さんは昨年秋、同飛行場跡地を調査しようと、県営しらこばと水上公園に隣接する跡地を訪れた際、上部に金属の柱のようなものが挿入されたコンクリート台座（約1㍍四方で高さ約80㌢）を発見した。国土地理院の「地図閲覧サービス」で同飛行場跡周辺の地図を確認すると、28年（昭和3年）には「送電線」の記載があったが、戦後の49年（同24年）の地図では滑走路跡の記載だけで、送電線は消えていた。

このため秦野さんは、送電線の設置者と見られる東京電力（当時の東京電燈）の「電気の資料館」（神奈川県横浜市）を訪ね、学芸員らに調べてもらったところ、送電線は14年（大正3年）に設置されたものであることが分かった。

新潟県津南町の水力発電所から越谷を通り、東京都の「亀戸変電所」まで送電する、「上越線」と呼ばれた送電線で、当時の日本最高電圧の15万4000ボルトを送っていたという。同館は「大正時代の東京の電気利用の拡大や産業発展に寄与した設備」で、貴重なものと位置付けている。

秦野さんが確認した送電線台座は、同市南狭島と小曽川地区の農地の3か所。「謎の台座は送電線鉄塔の基礎の部分と判明した。終戦70年以上たっても台座と鉄がしっかりと残っていることに驚いた」と秦野さん。「この台座跡により、越谷に飛行場があったことが裏付けられた」という。

近くの農業、川上博之さん（84）は「幼い頃、畑にあった送電線鉄塔のコンクリート製土台を見たのを覚えている」と話す。その土台は国道バイパス工事で撤去されたという。

国の近代化に貢献した産業、交通、土木に関する「近代化遺産」は現在、全国で11115か所が認定されている。秦野さんは「この送電線遺構を近代化遺産にするよう行政に働きかけ、撤去を知る人たちから聞き取り調査を進めたい」と話す。

次回発行は3月28日

秦野さんの研究リポート「越谷飛行場と送電線鉄塔の基礎の遺構群」は、秦野さんが副会長を務める「越谷市郷土研究会」のホームページに公開されている。

調査内容は、昭和３年（1928）測量の「2.5 万地形図」等の確認により、

「昭和 3 年（1928）以前に完成していた「上越幹線」という「送電線」のルートが、第二次世界大戦末期に建設された「越谷飛行場」の敷地内となり、「運行の支障となるため」に、ルート変更（迂回）を余儀なくされた」

という仮説です。

調査を開始した当初の筆者の仮説は、越谷市内に３ヶ所残された「送電線鉄塔」の基礎の遺構群の役割を、「越谷飛行場」の建設に伴い設置された附属の「送電線鉄塔」と仮定し、終戦後に「越谷飛行場」と共に遺構になったと推測していましたが、考察を進めていく中での「逆転の発想」により、既に完成していた「送電線」のルート上にあった「送電線鉄塔」が、「越谷飛行場」の建設に伴い遺構となったという現在の仮説に修正しました。

尚、越谷市内に３ヶ所残された「送電線鉄塔」の基礎の遺構群自体は、土地の所有者や地元の方々の間で、広く知られた存在でした（川上 博之様談）。

「送電線」のルート変更（迂回）の原因として仮定した「運行の支障となるため」という推測は、管見の限り該当する史料が見当たりませんので筆者の仮説になりますが、かつて「上越幹線」という「送電線」のルートが、後に建設された「越谷飛行場」の敷地内に存在し、ルート変更（迂回）が行われたことは紛れもない事実となります。

「東武よみうり」掲載時には、東京電力が運営する「電気の史料館（横浜市鶴見区）」の学芸員による調査の回答が記事になりましたが、その後に筆者が独自に入手した史料により、より詳細な事実が判明しましたので、以下に紹介致します。

① 大正８年（1919）５月

「東京電力」の前身である「東京電灯」は、信濃川水系で電源開発を行うために「信越電力」を設立

② 大正 11 年（1922）８月

「上越幹線」の第１期工事（信濃川 － 前橋間、亘長 116km）の起工

③　同年（1922）12 月 13 日

「上越幹線」の竣工（中津川第二発電所（1 万 8,000kW）の発生電力を 6 万 6,000V で送電）

④　大正 13 年（1924）1 月

「上越幹線」の第 2 期工事（前橋 － 東京間、亘長 107km）の施工許可を取得

⑤　同年（1924）4 月 25 日

「上越幹線」の竣工（中津川第二発電所及び中津川第一発電所（3 万 8,950kW）（注 出典②：6 月 30 日竣工）の発生電力を送電）

同日から、信濃川水系の水力発電所と東京の亀戸変電所との間が直接結ばれ、15 万 4,000V に昇圧して使用開始。

※　この時使用された「上越幹線」の「送電線」のルートが、昭和 3 年（1928）測量の「2.5 万地形図」等に記載されました。

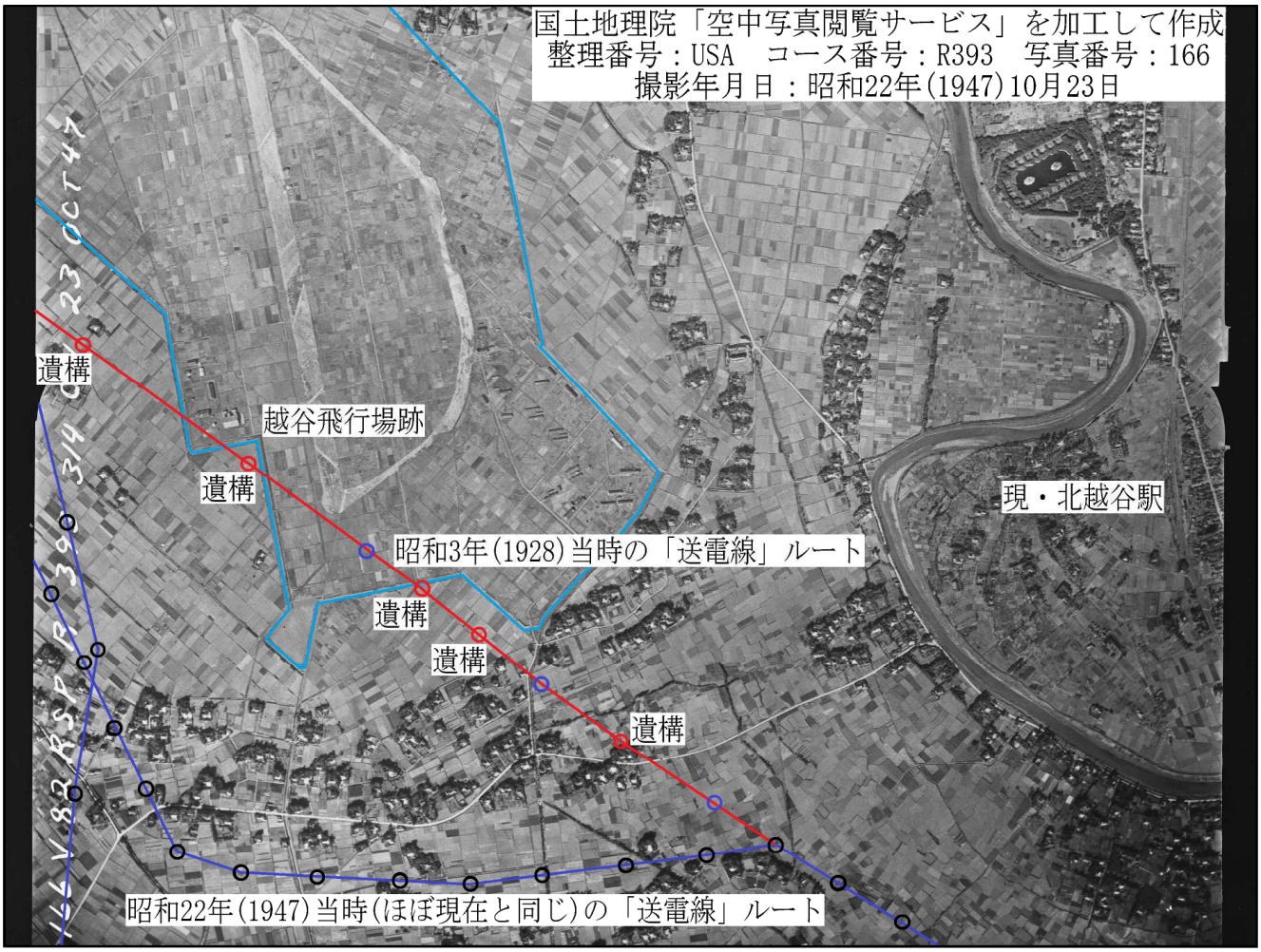
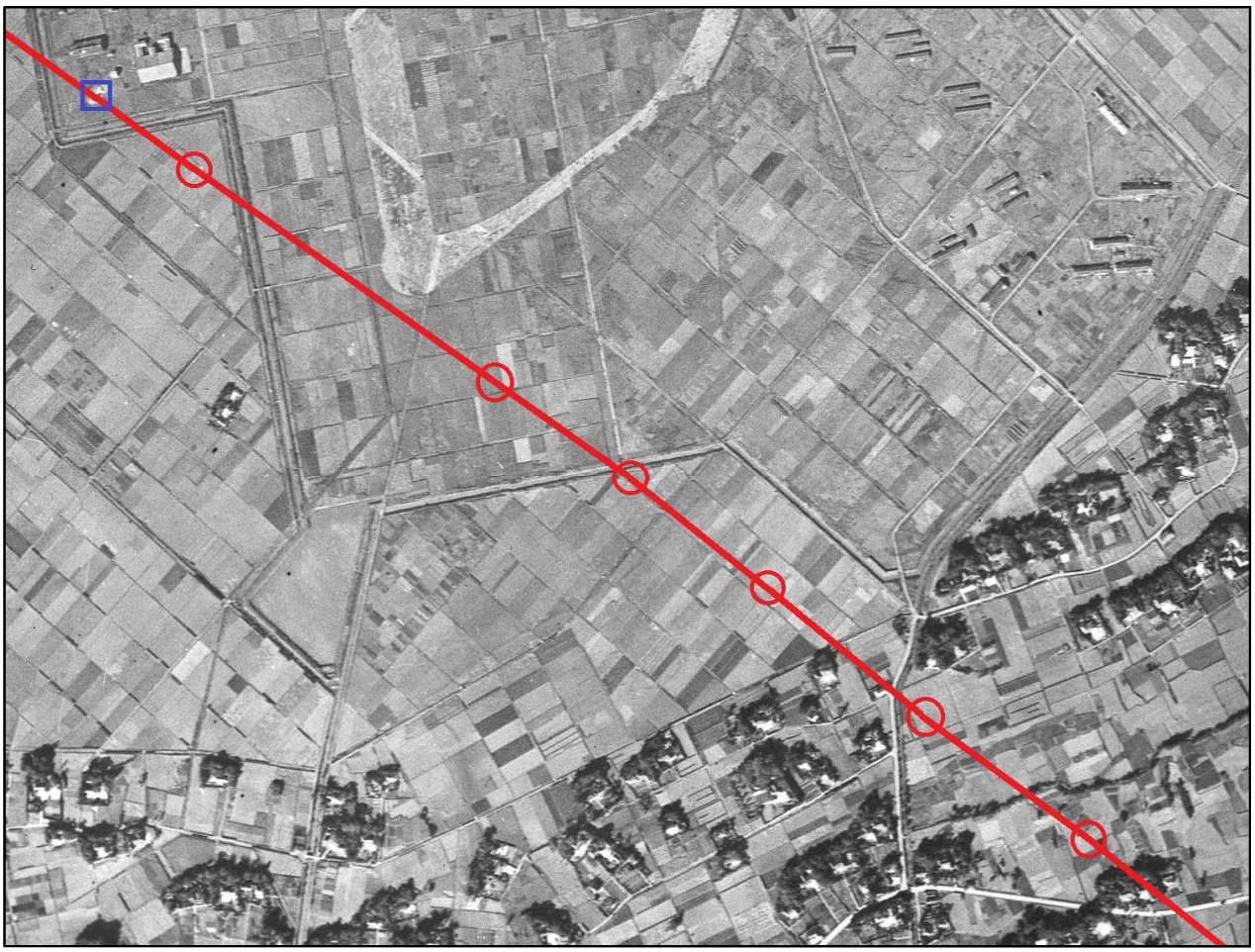
出典：

①佐々木 聡／東京電力株式会社編（2002）
『関東の電気事業と東京電力 電気事業の創始から東京電力 50 年への軌跡』
東京電力株式会社 pp.235-236

②東京電灯株式会社編（1936）
『東京電灯株式会社開業五十年史』
東京電灯株式会社 年譜 pp.1-20

「NPO 法人越谷市郷土研究会」ホームページ
「越谷飛行場」と「送電線鉄塔」の基礎の遺構群　秦野 秀明
http://koshigayahistory.org/220209_kiso_ikohgun_h_h.pdf

中津川第一発電所（新潟県中魚沼郡津南町） 撮影：2022 年 5 月 4 日・秦野 秀明	中津川第二発電所（新潟県中魚沼郡津南町） 撮影：2022 年 5 月 4 日・秦野 秀明


国土地理院「空中写真閲覧サービス」を加工して作成
整理番号：USA　コース番号：R393　写真番号：166
撮影年月日：昭和22年(1947)10月23日
遺構
越谷飛行場跡
遺構
現・北越谷駅
昭和3年(1928)当時の「送電線」ルート
遺構
遺構
遺構
昭和22年(1947)当時(ほぼ現在と同じ)の「送電線」ルート